

葉や枝に集まり大きくなる雨粒



文と写真◎ 南光 一樹 Nanko Kazuki

森林防災研究領域

ヒノキの葉先の雨粒

葉の上で集まって結合した水滴は、しだいに大きくなって落下する。

雨が急に降り始めた時、木陰に入ると雨宿りをすることが出来ます。しかし、雨が長く降り続けると、やがて樹の下でも体が濡れはじめ、ときには樹の下の方がより濡れてしまうこともあります。これは、葉や枝に蓄えられた雨粒が、枝のたわんだ部分に集中するためです。

このような樹の下に降る雨を「林内雨」「樹冠通過雨」と呼びます。俳句の世界では「青時雨」「青葉時雨」という季語で言い表します。時雨自体は冬の季語ですが、木々が青々と繁る様子を加える事で夏らしさを表現した素敵な言葉です。

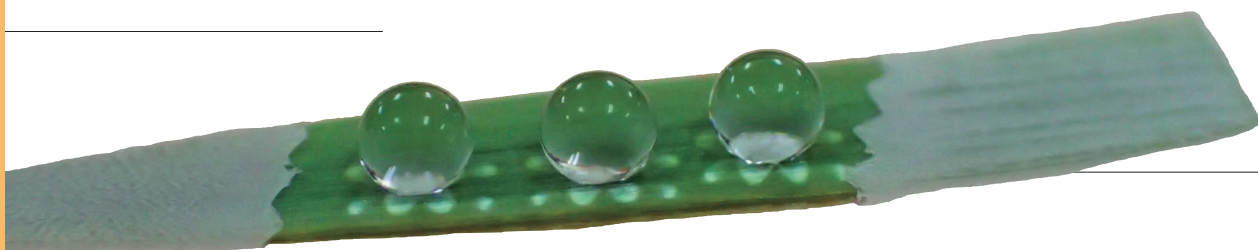
森林で、雨が最初に出会うのは葉や枝です。雨粒は、葉や枝にくっついたり、もしくはぶつかって砕けたり、飛沫になったりします。雨粒は、葉や枝の表面の性質によつてのつべりとくっついたり、まるで球のように乗っかかりと、くっつき方も様々です。

枝や葉の上で、やがて雨粒は集まって結合し、林外では降らないような大きな雨粒を作ります。「強い雨だな」と感じるときでも、ふつう雨粒の直径が4ミリを超えることは稀ですが、樹の下では粒径4〜7ミリの雨粒がポタポタと落ちてきます。雨の日に樹の下を歩くと、傘に感じる音や衝撃を実感できるでしょう。

枝や葉が雨粒を集めることは、霧の時に特に面白い現象を引き起こします。森林に霧がかかると、霧の小さな水滴が樹木に捕捉され、それが集まって大粒の水滴となつていたり落ちます。これを「樹雨」と言います。森林の外では雨が降っていないのに、森林の中ではポタポタと雨が降り続く不思議な現象です。

雨粒は、一つ一つは極めて小さな粒ですが、葉や枝での水滴の作られ方を調べていくことで、樹木がどうやって濡れていくのか、また、地面にどうやって雨が到達していくのかわかるようになります。

小さなことのコツコツとした積み重ねが、森林と水の関係を作り出しています。♥



モウソウチクの葉の上の水滴

葉に生えている細かい毛にはじかれて、水滴が球のようになる。



アカガシの葉の上の水滴

あまり毛の生えていない葉の上では、水滴はのっぺりとくっつく。